

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Conservation and Publishing photos taken by  
Pioneer Anthropologists on the web : Nepal Photo  
Database

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009338">http://hdl.handle.net/10502/00009338</a>

# パイオニア人類学者が撮影した現地写真の保存・公開

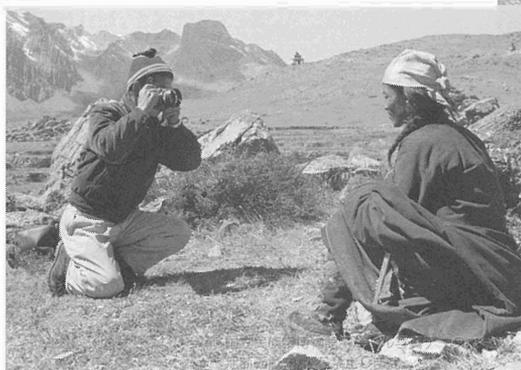
## ネパール写真データベース

文 南真木人

インターネットの飛躍的な発達にともない、日本の古写真のデータベースを公開する研究機関が増えている<sup>(1)</sup>。だが、日本のパイオニア人類学者が海外の調査地で撮影した写真をデジタル化して公開するプロジェクトは、寡聞にしてまだ少ないようだ。そうした取組みは、大阪府立大学総合情報センターの「中尾佐助スライドデータベース」(1958年にブータンで撮影された写真約1,300点を公開)をもって嚆矢とするが、国立民族学博物館(以下「みんぱく」)でも2006年4月から、元京都文教大学教授の高山龍三氏らが撮影した写真、約3,600点を「ネパール写真データベース」として、インターネットを通じて公開している。ここでは、このプロジェクトの目的や展望について紹介する。

### 西北ネパール学術探検隊

ネパール写真データベースは、1958年に「西北ネパール学術探検隊」に参加した高山龍三氏らが撮影した写真をデジタル化して保存し、これ以上の劣化・退色を防ぐとともに、そのデータベースを「みんぱく」のウェブサイト上で一般に公開するプロジェクトである<sup>(2)</sup>。



飯島氏、村人の写真を撮る。ツアルカ。(1958年10月5日、撮影：高山龍三)

西北ネパール学術探検隊(隊長川喜田二郎氏)は、京大大学生物誌研究会と日本民族学協会の後援のもとに組織された、民族学・生物学・農学研究と登山を目的とする遠征であった。その民族学的研究の成果は『民族学研究』に報告されたが(飯島1960, 高山1960, 川喜田1961; 1966)、この探検隊を有名にしたのは、鳥葬の映像を世界で初めて撮影した記録映画『秘境ヒマラヤ』(1960年、読売映画社、松竹配給)と川喜田氏の名著『鳥葬の国——秘境ヒマラヤ探検記』(光文社、1960年; 講談社、1992年)であった。

他方、同隊が撮影した写真は川喜田編の報告書『チベット人——鳥葬の民』(角川書店、1960年)に、カラー3点、モノクロ270点



石投げ縄を使う少女。ツアルカ。(1958年10月9日、撮影：高山龍三)

(収集した民具の写真29点を含む)が収録され、川喜田・高山著の『ヒマラヤ——秘境に生きる人びと』(カラーボックス1)(保育社、1962年)に、カラー56点、モノクロ38点が掲載された。さらに、同隊が収集した民具約400点のほとんどは、日本民族学協会付属民

族学博物館に寄贈され、文部省史料館への寄付(1962年)を経て、1975年から「みんぱく」が所蔵する<sup>(3)</sup>。

### ネパール写真データベース・プロジェクト

2004年春に、文化資源プロジェクトのひとつとして始まったネパール写真データベース・プロジェクトでは、高山氏の全面的な協力のもと4,492点の写真をデジタル化し、撮影者、撮影年月日、地域、内容(簡単なキャプション)を入力した。インターネット上ではこのうち、劣化や損傷が軽微な写真3,615点を公開している。

プロジェクトの目的は4つある。ひとつは、日本のパイオニア人類学者が撮影した貴重な歴史的写真を「みんぱく」が保管し、人類学史の一次資料として後世に残すことである。とくに、西北ネパール学術探検隊が撮影したネパール・ドルパ郡の写真は、チベット動乱(1959年)の1年前にネパール・チベット国境周辺の状態を記録している点で、またその調査報告が論文として発表されている点で、世界的にみてもきわめて貴重な資料である。

第2は、データベースを研究者および一般の方に公開し、研究や教育などに活用してもらうことである。50年前のネパールの写真はもとよりそれ自体に価値があるが、景観、生業、衣食住などの変遷や地形、森林、氷河など自然環境の変化に関する研究にも役立つと思われる。

第3は、調査記録を現地へ還元することである。データベースの英語版は、海外の研究者をはじめ、被写体となった現地の人びとやその子孫が、50年前の村の様子やすでに亡くなった人の写真に、より容易にアクセスできるように作成した。意見や要望、苦情を含め、現地の人びとや研究者との情報交換が進み、「みんぱく」がフォーラムとして機能することをめざす。

第4は、標本資料の多面的な情報を関連づけることである。データベースには現地写真の他に、探検隊が収集した民具(「みんぱく」の標本資料)のカラー写真295点が含まれる。これは高山氏が論文(高山1981; 1990; 1993)作成のために「みんぱく」において、ご自身で撮影したものである。データベースではこの標本資料の写真と、その



子どもたち。レーテ。  
(1958年7月20日、撮影：高山龍三)

使用しない着用状況を映し出す現地写真（複数）を相互にリンクさせ、付帯情報の連関をはかった。ただし、高山氏による民具の詳細な解説（上記3論文）をデータベースに取り入れる作業はまだ実現できていない。

こうした目的に呼応して、プロジェクトではいくつかの特徴的な方針が導かれた。まず、研究や教育の未知で多様なニーズに対応できるように、写真は恣意的に選択せず、損傷や劣化の激しい写真を除く全点公開を原則とした。また、同様の理由と調査記録の現地への還元、すなわち「誰が写っているかが識別できること」を重視し、デジタル入力したそのままのサイズの写真を公開することにした。つまり、インターネット上の写真の公開でよく目にする「個人が特定できないサイズに縮小する」という方針を、あえて採用しなかった。

その代わり写真には「国立民族学博物館ネパール写真データベース 無断転載・複製を禁止します」という透かし文字を入れ、冒頭に「撮影当時、被写体となった方がたに肖像権があるという考えは、まだ一般的でありませんでした。そのため、このデータベースにおける人物写真は、必ずしもご本人から公開の承諾が得られていません。被写体の人物にお気づきの点がありましたら、下記の『お問い合わせ』までご連絡ください」という一文を添えた。こうした判断と試みが、肖像権をもつ方がたの理解と賛同を得られるのか、また無断の二次的利用を抑止できるのかは、今後の反応や推移を見守らなければならない。

## 海外の動向と今後の展望

ネパールやチベット関連に限っても、類似するプロジェクトは欧米でも始まっている。例えば、米国のヴァージニア大学図書館では、2000年3月、写真のデータベースを含む総合的なチベット学

のウェブサイト（The Tibetan & Himalayan Digital Library）を開設した。また、2000年12月には、英国のケンブリッジ大学考古学・人類学博物館と米国のコーネル大学人類学部が共同ですすめるプロジェクト（Digital Himalaya）が、同名の充実したウェブサイトを立ち上げた（Shneiderman and Turin 2002）。そこではネパール研究の先駆者である、フューラー＝ハイメンドルフ氏などが撮った調査地の写真や映像を見ることができる。なお、Digital Himalayaとネパール写真データベースは、話し合いにもとづき相互にリンクを張っている<sup>(4)</sup>。

他方で、古写真を用いた展示と研究は、オックスフォードのピット・リヴァース博物館が2003-4年に「ラサを見る——英国人が描写したチベットの首都1936-1947年」という展覧会を開催したように（Harris and Shakya 2003）、高い関心を呼んでいる。ネパール写真データベースも、いつの日か展示にまで発展させることができればと願う。

冒頭でも述べたように、ネパール写真データベースはパイロット・プロジェクトであり、原作者の地名表記を踏襲するか、改めるかといったことから、写真のサイズ、肖像権、著作権（覚書の取り交わし）、無断の二次的利用の予防などの問題まで、その都度、情報システム課のスタッフと議論しながら判断し、公開にこぎつけた。今後も問題があれば速やかに改善するという柔軟な姿勢と体制を維持して、貴重な写真の公開および現地への還元と、肖像権の保護という相反する課題を調整し、ネパール写真データベースのより一層の充実をはかっていきたいと思う<sup>(5)</sup>。

## 注

(1) 例えば、長崎大学付属図書館の「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」は秀逸で一見の価値がある。



隊員の記念写真。ポカラ。(1958年、撮影：大森栄)

(2) ネパール写真データベースには『チベット人——鳥葬の民』（角川書店）の編集後、高山氏が保管していた、隊長の川喜田二郎氏、隊員の小方全弘氏、飯島茂氏、西岡京治氏、並河治氏、曾根原恵夫氏、大森栄氏が撮影した写真約490点も含まれる。なお、データベースについては高山氏がすでに簡単な紹介をしている（高山2006）。

(3) 「一部は天理大学付属天理参考館に寄贈された。」（高山1981:216）。

(4) 2005年6月、私はケンブリッジ大学でDigital Himalayaを創設したアラン・マクファーレン氏とマーク・トゥリン氏に会った。マクファーレン氏は自らのウェブサイト内のFilms of Anthropological and Other "Ancestors"を開いて私に見せ、日本でも紹介してほしいと述べた。そこには故人を含む、多くの名高いバイオニア人類学者などのインタビュー映像が収録されている（<http://www.alanmacfarlane.com/>）。

(5) ネパール写真データベース・プロジェクトは、個人の提案にもとづくものであり、「みんぱく」が組織をあげてバイオニア人類学者の写真を保存・公開する事業を開始したのではない。この点はDigital Himalayaも性格が似ており、ケンブリッジ大学とコーネル大学の共同とは、実質、前者のマクファーレン氏およびトゥリン氏と後者のシュナイダーマン氏が共同でおこなう個人的プロジェクトを意味する。

## 参考文献

飯島茂 1960 「中部ネパールのタカリー族——Torbo民族誌—その1」『民族学研究』24(3): 175-196。

川喜田二郎 1961 「ネパール・ヒマラヤにおける2、3の生態学的観察——トルボ民族誌—その3」『民族学研究』25(4): 197-238。

—— 1966 「チベット族の一妻多夫（1）——Torbo民族誌—その4」『民族学研究』31(1): 11-27。

高山龍三 1960 「トルボ地域の農牧チベット人経済——Torbo民族誌—その2」『民族学研究』24(3): 197-233。

高山龍三 1981 「チベット人民具の研究——予報」『大阪工業大学中研所報』13(3): 216-231。

—— 1990 『失われたチベット人の世界』日中出版。

—— 1993 「チベット人民具の研究 2」『大阪工業大学中研所報』26(3): 167-179。

—— 2006 「世界の屋根の村での撮影」『月刊みんぱく』8月号、5頁。

Harris, Clare and Tsering Shakya. 2003. *Seeing Lhasa: British Depictions of the Tibetan Capital 1936-1947*. Chicago: Serindia Publications.

Shneiderman, Sara and Mark Turin. 2002. Digital Himalaya: An Ethnographic Archive in the Digital Age. *European Bulletin of Himalayan Research* 20/21: 136-141.

ネパール写真データベース  
(<http://www.minpaku.ac.jp/Nepal>)

## みなみ まきと

研究戦略センター准教授。

専門は、人類学。

論文に、「カースト社会の『森の民』」（『熱帯アジアの森の民——資源利用の環境人類学』人文書院、2005年）、「海外情報型クイズ番組と人類学」（『電子メディアを飼いならす』せりか書房、2005年）などがある。